本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター
2005年4月1日 第9号

●発行元　人文ネットワーク
●印　刷　㈱ 新栄堂　●編集制作　㈱ 新評論編集部
●事務局　㈱ 新評論編集部内（担当：吉住）
〒169-0051　東京都新宿区西早稲田3-16-28
Tel.03-3202-7391　Fax. 03-3202-5832
E-mail: yoshizumi@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性のみに腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実的プロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら――つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく――、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニューズレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介させて頂くものです。

『掌の中の無限――チベット仏教と現代科学が出会う時』読書会／巻頭文…桑田禮彰

神秘的精神性にどう向き合うか

❖フランス68年派とベトナム難民の対話

まず二人の対話者に注目すべきである。マチウ・リカール（1946年生れ）は分子生物学者からチベット仏教の僧侶になったフランス人、チン・スアン・トゥアン（1948年ハノイ生れ）はアメリカで天体物理学者になったベトナム人。二人は、若いとき五月革命とベトナム戦争の時代を生きた、いわゆる「68年派」世代（我が国で言う団塊の世代）に属する。

フランスの68年派世代には政治から宗教へ向かう強い傾向が認められた。特にチベット仏教に惹かれる者が少なくなかったが、その点でリカールもその一人に数えられる。また、ベトナム戦争中、ベトナムのエリートたちは戦禍を逃れ祖国を離れて、「難民」としてフランスをはじめとする欧米へ向かったが、「敵国」アメリカへ渡ったトゥアンも同世代の波をまともに浴びた一人とみることができよう。

❖仏教と科学の背後の時代性

おそらく二人は、同時代の証言者となる資格を持っている。ところが本書の対話では、政治・社会の言葉はほとんど語られず、二人が同時代をどう生きたかという証言は見当たらない。リカールはなぜチベット仏教に帰依したのか、トゥアンは自分がベトナムを離れアメリカで天体物理学の研究者となったことをどう考えているのか――少なくとも同時代のコンテクストに即した説明はない。

二人の沈黙を責めるのではなく、（リカールの前作『僧侶と哲学者』にはそうした証言があるので、それを参照しつつ）対話の背後に同時代のコンテクストを発見することは読者の仕事と見なすべきだろう。むしろ二人は、同時代を生きながら、それぞれ「仏教の言葉」と「科学の言葉」を自分の言葉として新たに発見したのだと思う。

❖宗教の社会的正統性

さて、対話である。本書では、仏教は知恵・観想・神秘・直観・精神性の側に、科学は知識・合理性・分析・知性の側に、置かれている。つまり、ここでは仏教は、特に西洋の科学的知性の神秘性・精神性（霊性）の欲求に応えるものと位置づけられている。だからこそ「チベット仏教」なのだ。

西洋の科学的知性の傲慢さに対する反省というかたちで展開された西洋近代批判が、東洋の神秘主義に惹かれチベット仏教に向かう――という或る意味でオーソドクスな構図がここにも存在している。これまで、この構図にしたがって宗教と科学の間で無数の対話が行なわれてきたはずだが、問題はその対話の在り方である。

宗教は神秘に関わる以上、或る種の「いかがわしさ」を持たざるを得ない。そこで現代の宗教の多くは、この自らの「いかがわしさ」を払拭し社会的な正統性を獲得しようとして、科学と対話する。宗教は詐欺の恐れがあり、科学は社会的に信頼されているから、というわけだ。

❖科学的知性の自己変革のドラマ

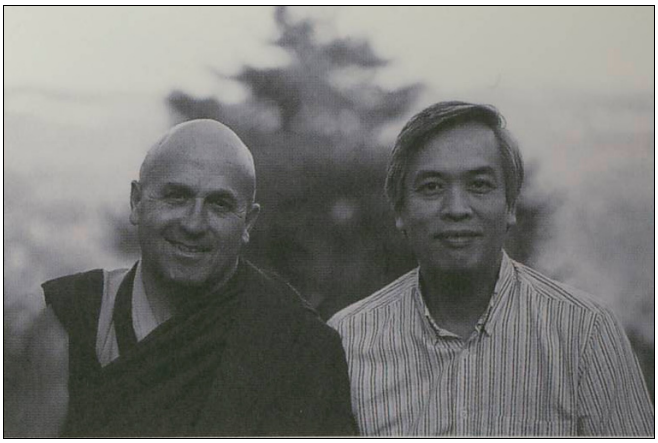
しかし宗教と科学の対話には、神秘的精神性に向き合って根本的な自己変革を迫られる科学的知性のドラマが発見できる場合もある。読者はあくまでも科学的知性の側に立ち「いかがわしさ」に注意しながら、そうしたドラマをこそ本書の中に探すべきである。

「掌の中の無限」というタイトルは、イギリスの詩人ウィリアム・ブレイク『無垢の予兆』の冒頭の「一粒の砂に宇宙を見よ　一本の野の花に天国を見よ　掌の中の無限をつかめ」から取られた。リカールは本書の中で、この言葉を「宇宙の絶対的統一を洞察する仏教的悟り」と理解している。そっとつまんだ掌の中の野の花に天国を見ようとしながら、読者の知性は、甘美な眠気と格闘しつつ、どのような新しい論理を発見するだろうか。

（くわた・のりあき　駒澤大学教員・哲学）

『掌の中の無限』M・リカール＋T・X・トゥアン著
菊地昌実訳　新評論　二〇〇二　四四八頁　三九九〇円（税込）

●『掌の中の無限』原書 ***L'infini dans la paume de la main―Du Big Bang à l'Éveil***, NiL éditions, Paris, 2000.　フランス人チベット僧とベトナム人天体物理学者との真理探究に根ざした白熱対論。精神性と科学の限りない接近から、人間存在の永遠の問いに立ち向かう。本書姉妹版『**僧侶と哲学者**』（J=F. ルヴェル＋M.リカール、菊地他訳、新評論、'98）は同じ問いの中から仏教との対比で人文・社会科学の存在理由が鮮やかに浮彫られる。



© R.DEMANDRE/Opale/BCF, Tokyo

■マチウ・リカール（Matthieu RICARD）
1946年生まれ。チベット仏教の僧侶。パストゥール研究所のノーベル医学賞受賞者フランソワ・ジャコブ教授の指導の下、分子生物学の国家博士号を取ったあと、チベット語を学び、仏教修行の道に入る。チベット仏教の文献を欧米に翻訳・紹介し、またダライ・ラマのフランス語通訳も務める。著書として、『僧侶と哲学者』（J=F.ルヴェルとの共著、1997/ 邦訳：新評論、1998）、『幸福論』（2003）ほか。

■チン・スアン・トゥアン（Thuan TRINH XUAN）
1948年生まれ。ヴァージニア大学教授（天体物理学）。ハノイに生まれ、サイゴンで初等・中等教育を受けたあと、フランスに留学しようとするが、当時の政治情勢のために果たせず、スイス、そしてアメリカへ渡り、カリフォルニア工科大学で天体物理学を学ぶ。銀河形成理論の指導的専門家の一人。その宇宙論入門書、『秘密の調べ』（1988）、『カオスとハーモニー』（1998）は欧米で広く読まれている。

特別寄稿

『掌の中の無限』を訳して…

どんより暗い雲間から差す光

●**菊地昌実**（本書訳者）

私はチベット仏教にも天体物理学にもまったくの素人である。ただ単にフランス語が読めるというだけで、この本を読んで感銘を受け、どうしても日本の若い意欲ある人たちに読んでもらいたいと思った。

現代の状況は暗い。特に若者にとって上空は雲に閉ざされていると感じられるだろう。未来への展望も見えない。科学の成果によって便利な道具がふんだんに開発され、経済発展のおかげで日常生活は快適になったはずなのに、なぜこんなに暗いのか。そのわけを、どこからどうやって考えたらいいのか。この本は、雲間から差す光のように、考えるための最初の手がかりを与えてくれると、私には思われた。

手がかりとは、私たちを取り巻くこの世界、現象世界をどうとらえるかである。僧侶の問いに答える形で科学者は実に見事な全体図を作成してくれる。量子力学と相対性理論の素人向けの解説は、もちろん易しくはない。しかし、理解しようと努めるなら、その努力に見合って、納得のいく世界像が得られる。しかも、その世界像が、仏教の説く「空性」、何物もそれ自体では存在せず、すべてがすべてと相互に依存し合っているという考え方と重なることを知るとき、単なる知的興奮を超えて、不思議な宇宙感覚を覚える。

この光ですぐにまわりが明るくなるわけではない。前に見えなかったものが見えることで、何かが始まる可能性が初めて生まれる。僧侶が指し示す「悟り」への道も、一つの方法ではある。しかし、何も約束されてはいない。大事なのはまず知ること、苦労しながら知る喜びを感じることだ。

（きくち・まさみ　北海道大学名誉教授　20世紀フランス文学）

仏教――その「幻想」の過去・未来

●**大野英士**（埼玉大学、早稲田大学他、教員／文学）

初期仏典は「蛇がみずからの皮を脱ぐように」現世を解脱することを説いたという。人間の苦しみを欲望の作り出す「幻想」と観じ、すべての幻想から自由になったとらわれのない態度で、再び現実と向き合うことこそ、仏教のいう「空」の本義ではなかったのだろうか？　釈迦在世の時代、「輪廻」は永劫に続く苦しみの連鎖に人間をつなぎ止める動かしがたい「事実」であった。その「輪廻」をも欲望の生み出す「幻想」と観じたところに仏教の出発点はあった。

仏教がアインシュタインやハイゼンベルク等、今日の科学的成果をあらかじめ予見したという主張は、科学に対する仏教の優位性を保証するものではない。ましてや転生を最新の物理学を動員して「真理」と強弁する身振りは、仏教を科学とは反対の新たなオカルト幻想へと後退させかねない危険をはらむ。麻原某がダライ・ラマの弟子を僭称したこともあながち故なきこととはいえないのだ。

仏教は、本来幻想の体系にすぎない宗教を、幻想を破壊する論理的な手法として脱構築した希有な宗教である。幻想から覚醒した自由な目で、現代の「幻想の未来」を見つめる上で、仏教は依然豊かな示唆を与え続ける。その意味で、仏教との今後の「対話」の可能性を信じたい。合掌。

オウム以後に求められるもの

●**白石嘉治**（上智大学他、教員／文学）

オウム事件とは何か？　椹木野衣のコメントが印象に残っている。信者たちの世代は「パンク」と「ヤマト」にわかれていたが、事件は「ヤマト」の連中が引き起こしたものだ、と。

「ヤマト」とは『宇宙戦艦ヤマト』のことである。宇宙船の自爆によって、地球を救うというアニメだった。オウムの唯一の宗教的独創は「独房修行」であるといわれる。サティアンと呼ばれた建築物にも、窓がなかったことを想起しよう。信者たちは宇宙船のような空間に閉じこもり、死を媒介にした救済を妄想していたのではないか？

他方、「パンク」は街路に繰り出していった。彼らは68年の5月革命で先陣を切ったシチュアシオニストの係累であり、70年代にイタリアを席巻したアウトノミア運動の伴走者である。ドゥルーズはフーコーの「抵抗」概念に後者の反響を見て取ったが、「パンク」にとっても「抵抗」とは生そのものの肯定にほかならない。だからこそ、99年のシアトル*以後、彼らはつねに反グローバリズム行動に登場する。世界を覆うシステムは、自らの生を肯定する抵抗によってくつがえるのであり、そこで働いているのは、オウム以後に求められる「掌」に「無限」を見出すような政治学への意志である。　＊――第3回WTO閣僚会議の開催地シアトルで行われた大規模な抗議集会・デモ。

摩天楼と岩山

●**出口雅敏**（早稲田大学人間総合研究センター教員／文化人類学）

夜、月とセットになった新宿の高層ビル群を見かけると、ときどき、幼い頃に見た映画『キングコング』の一場面を思い出す。孤島のジャングルから無理やりNYに連れて来られたキングコングは、大騒ぎの街の中を必死に逃げ回る。途中、月明かりに浮かぶ夜の摩天楼を見て、そこに見慣れた故郷の月と岩山を発見する。ビルに登り頂上に辿り着くも、ヘリからの銃撃に倒れ落下する有名な場面だ。多くの人と同様、私は彼を不憫に思った。なぜ彼は、摩天楼と岩山を見間違えたのか。

キングコングの望郷の念は、生まれ故郷の風景と月明かりの下の高層ビルを対応させた。だがそこに稚拙さはない。人が彼に胸打たれる理由も、じつは自分も彼と同じだと直感するからだ。世界の複雑さと単純さは、人間のそれに対応している。世界の多様な色や形との対面が、人間を彩り形作っている。世界を理解する根源的場面では、神話的思考と科学的思考、感性と知性も切り離されることはない。キングコングのように、野生の感性と知性を必死に働かせ、見慣れているものを周囲に探し出し、それらを並べたり組み合わせたりしながら世界を理解する仕方だ。だから、落下したキングコングは硬いアスファルトの上で死んだのではない。密林の柔らかい下草の上で息絶えたのだと思う。

座談会 『掌の中の無限 チベット仏教と現代科学が出会う時』を読む

2004年12月18日、第28回例会が開かれた（秋津壱番館集会室、14：00～18：00）。参加者は大野英士、白石嘉治、出口雅敏、桑田禮彰。以下は、各人の発言要旨である（編集：桑田）。

■精神性に向き合った知性の姿勢

桑田（基調発言）▶本書のテーマは、分裂してしまった「宗教と科学」ないし「精神性と知性」の再統合です。なるほど、人類学者レヴィ=ストロースをあらためて参照し、宗教と一体になった科学、神話的な根を維持したまま現実に柔軟に対応できる「具体の科学」の存在を考えれば、そうした分裂の再統合のテーマは、決して普遍的なものでなく、きわめて特殊西洋近代的なものであり、圧倒的な力を振るう西洋的科学の支配下にある者にとってのみ緊急な課題となるでしょう。実際、本書の二人の対話者は、いずれも現代の西洋科学の最前線で働きながら、宗教的な精神性を求めて仏教へ向かいます。

しかしそれでもなお、『野生の思考』の「具体の科学」であれ、西洋近代に起源を持つ現代科学であれ、いかなる場合でも「精神性に対する知性の在り方」を問題にしうるという意味で、このテーマの普遍性を認めるべきです。古今東西を問わず、およそ知的な神学体系を備えた宗教において、「信と知」の問題は普遍的であって、本書の対話は、きわめて現代的なその一例と言えます。端的に言えば、そこで問題なのは、精神性に向き合った知性の姿勢です。科学的知性は宗教的なものにぶつかって躓くかもしれません。そのとき知性は、その躓きをどのように受けとめ自己変革して行くのか――そうした変貌のドラマが、本書を読む際の最も興味深いところです。

■社会科学的知性の展開の必要

でも、本書が対談形式で一般読者に向けて書かれていることもあって、対話者二人の（特に分子生物学者からチベット仏教の僧侶になったリカールにおける）知性の変貌の具体的足取りを追うことは、感覚的な言葉の羅列のせいで困難です。また、「自然科学者」と「僧侶」ゆえの知性の狭さも、この作業を難しくします。現在、科学的知性は、自然科学の領域だけでは、十分な広がりを持ったことになりません。社会科学的知性としての広がりも持つ必要があります。いやむしろ、「宗教」と「科学」の統合は、両者の社会的存在をリアルに把握する社会科学的知性を経過せずには、不可能なはずです。特に天体物理学の抽象性とチベット仏教の観想性が、社会科学的知性の展開を難しくしています。

哲学者ベルクソンは、「自らの生命的起源を忘却した知性に、その起源を思い出させるのが宗教の機能だ」という意味のことを言いました。社会科学的知性の展開の必要という点からすると、「自らの民衆的起源を忘却した科学に、その起源を思い出させるのが宗教の機能である」と言えるでしょう。たとえばリカールのように利他主義道徳を全面に出し過ぎると、社会科学的知性は柔軟さを失い、「功利主義」に対して硬直した姿勢を取って宗教の民衆性を取り逃がしかねません。

■超越・神秘を前にした言説・理性審級の保持

大野▶この本について限れば、マチウ・リカール氏のチベット仏教のセクト的な党派性は明らかです。仏教経典の成立には千数百年に及ぶ長い歴史がありますが、残念ながらリカール氏は前作（『僧侶と哲学者』）とは異なり、いっさいテクスト・クリティクを行なわないまま、全ての仏教教説を仏陀の言葉として語り、たとえばダライ・ラマの輪廻転生など、

座談会の模様

かなりいかがわしい「教理」を無批判に押し出し、その立場から科学を「批判」しています。また、精神分析を攻撃する場合など、対象をあらかじめ矮小化し、本来の姿とは似ても似つかないものを「批判」してこと足れりという場面がしばしば見受けられるのも残念です。

こうした問題点は今回の限定的なテーマ性ゆえとも考えられますが、最終的には、リカール氏のチベット仏教的な「空性」論の立場、端的に言えば「悟り」の体験に由来するのかもしれません。「悟り」とは、「言語を超越・排除したところで得られる直接的で完全な認識」のことですが、それは、ラカン派の精神分析なら「象徴的なものを抑圧した果てに現われる想像的な神話的幻想」として分析するものではないでしょうか。人間は超越や神秘に憧れますが、そうしたものに向き合いつつ、言説・理性の審級をぎりぎりのところで保持することが重要なはずです。その点で、リカール氏の手法には疑問があります。

■大きな物語から小さな物語へ

出口▶本書は「西洋と東洋の出会い」というよりも「西洋による東洋の発見」であり、「近代科学批判・近代主義批判」の思潮の系譜に属し、20年ほど前流行した「ニュー・サイエンス」の流れにも連なるかもしれません。

本書では、レヴィ=ストロースが『野生の思考』で行なったように神話的思考と科学的思考の根源的同型性が探究されるのではなく、逆に、神話（宗教）的思考と科学的思考の両者が一旦「分離」され「補完」関係――すなわち神話を科学で、科学を神話で相互に基礎付ける関係――に置かれる。つまり大文字の「科学」と「宗教」が、相互に「補完」し合うものとして設定され、それぞれを代表する「科学」エリートと「宗教」エリートが対話を通じ壮大な「大きな物語」を語ります。

しかし「オウム以後」を生きる私たちは、宗教と科学の関係について、むしろ「小さな物語」を語る必要があります。社会科学的知性（例えば最近の宗教社会学）は、社会的現実の真っ只中に具体的なかたちで「霊性」（精神性）の所在を発見し、具体的な人間の営みの現場（セルフ・サポートグループ、マクロビオティック、代替医療など）で宗教と科学の関係を「小さな物語」として語っています。

■知性はニューエイジの閉鎖性を越えられるか

白石▶いわゆる「ニューエイジ（精神世界）」本と呼ばれる書物があります。精神性を科学主義的な言説によって補強し、精神性を社会的なものから完全に切り離すような書物のことです。そこから、孤立した個人の「読書宗教」などと言われるわけです。

本書では、中国の強制収容所の問題への言及など、社会との接点が見失われているわけではありませんが、前作に比べると必ずしも十分とは言えません。チベット仏教に帰依するフランス人僧侶とアメリカに亡命したベトナム人科学者の対話であり、しかも二人はいわゆる「68年世代」です。少なくとも訳者「解題」で、本書に伏在する社会と政治への回路を、あらためて喚起する必要があったのではないかと思います。そして、そのことによって、もっと明確に「ニューエイジ」本と一線を画すべきではなかったでしょうか。

「精神性に向き合った知性の姿勢」（桑田）、「超越・神秘を前にした言説・理性の審級の保持」（大野）について言えば、その典型としてデカルトが思い起こされます。その「方法的懐疑」において、感覚、夢、そして「欺く神」ないし「悪しき霊」というように、デカルト的知性は、より困難な次元に進みながら試練を受けます。特に「欺く神」ないし「悪しき霊」の次元は、一種の超越・神秘が開かれる次元であり、そこにおいて知性の究極的な在り方を、発見できるように思えます。

書評

『掌の中の無限』＋『僧侶と哲学者』

評者　土屋　進（中央大学他、教員／現代思想）

来たるべき思想——The truth is out there

仏教はなぜ生誕の地インドを追われ、なぜ民族や国境を超えて世界に広まったのだろう？　その答えを私たちは本書が解き明かす仏教の思想原理から推察することができる。仏教思想は、カーストという階層制度を解体し、国家といった外在的な管理政治制度を超える自由思想であるからだ。

自由思想の原理と世界認識を持つ仏教を、幸運にも私たちは本書『掌の中の無限』と M.リカールの前作『僧侶と哲学者』を併せ読むことによって概観できる。そして改めて、仏教思想がいかに私たちの生の根源に関わる思想であるかを知ることができるだろう。この二冊は、かつて一流の分子生物学者であった仏僧リカールが、対談者に西洋の一流の科学者と哲学者を迎え、西洋の哲学科学思想と仏教思想（ここでの仏教思想は信仰という観点からのみ説かれたものではない）を丹念に対質化することによって生まれた本である。こうした対論形式を使って、従来は内観という技法の実践によってしか知ることのできない仏教思想に新しい光を当てたのだ。しかもそれによって明らかになるのは、西洋哲学ではすでに失われた「知恵（智慧）」を持つ仏教思想が、最先端の物理学や哲学が描く世界像と極めて類似した世界を構成しているという事実だ。

仏教思想では主体も客体も固有の実体をもたず、「空性」が中心に据えられる。すべては相互関係の中で繰り広げられる「出来事」が事物という「現象」を作り上げる。例えば「水」という「現象」を作り上げているのは、それを構成する分子運動の均衡状態であり、均衡状態の関係が変われば「氷」となり、「水蒸気」となり、「水素」と「酸素」になる。同じように、「中道」と呼ばれる主体のあり方も、現実現象（他者・事物）との関わりの「間」に存在する。自我という静態的な統一性を抜け出し、主体は関わりの中で姿を変えるのだ。車を運転すれば、私は車の速度になり、車の大きさに拡大する。このように自在に変わる「空」は、全ての可能性に開かれている。そしてどのような「関係」を形作っていくのか（カルマ）によって、作り出される主体—客体の相互関係が変わる。この目前に広がる善悪の彼岸を越えた無限の可能性のなか、仏教哲学では、「慈愛」という関係の指針を提示する。それは近代的な「法」という個体管理の思想ではない。一人一人が世界を前にして、自由に「道」を切り開き歩む肯定的な思想なのだ。この思想はデリダの思想*に極めて近い。そして現代物理学の世界像そのものではないか。

＊——2000年前から数々の論争を経て構成されてきたこのような仏教思想は、西洋がやっとたどり着いた現代思想と見事なまでに一致する。ジャック・デリダの思想を思い起こそう。現前の形而上学批判（＝実体論批判）、痕跡（＝縁起）、関係の網目を主体と客体、自然と文化、善と悪といった二分法によって分離し、作り上げられるヒエラルキー秩序の脱構築（＝解脱）、そして（縁起が紡ぎ出す）原テキスト（＝空性）のもとで、それを演じること（＝カルマ）によって世界が生まれるという思想は、まさに仏教哲学と同じ構想ではないか。

書店からの声

●紀伊國屋書店新宿本店　和泉仁士

このところ店頭の様子を見るに、仏教への注目の高まりを感じる。それは世の中では、ごくささやかなブームなのだろうが、やはり世間が求めているからこそ、そのような流れが生じるのだろう。最近の出版物を見ると、『掌の中の無限』同様、科学者×僧侶の組み合わせの対談本が目立っている。養老孟司は『脳と魂』（筑摩書房）で玄侑宗久と対談し、『希望のしくみ』（宝島社）では、スリランカ仏教会の長老アルボムッレ・スマナサーラと対談している。どちらもとても売れている。『考える人 2005年冬号』（新潮社）では「考える仏教」と特集し、若い脳科学者の茂木健一郎と禅僧の南直哉が、とても活き活きと対談している。ダライ・ラマも20年ほど前から、科学者との対話を重ねてきたという。科学者はある時、道に迷う。道を照らす対話者として、自然の流れのように仏教僧侶が現れる。この『掌の中の無限』は、日々科学技術の進歩する混沌とした現代に生きる人々に、知的興奮と希望を与えてくれる。（いずみ・ひとし）

【お薦めの7冊】●脳と仮想（茂木健一郎 新潮社 1575円）●部分と全体（W.K.ハイゼンベルク みすず書房 3990円）●量子コンピュータとは何か（G.ジョンソン 早川書房 1890円）●アインシュタイン、神を語る（W.ヘルマンス 工作舎 2310円）●「問い」から始まる仏教（南直哉 佼成出版社 1470円）●身体化された心—仏教思想からのエナクティブ・アプローチ（F.ヴァレラ他 工作舎 2940円）●仏教「超」入門（白取春彦 すばる舎 1575円）＊価格は税込

ブック・リスト　宗教を知性的に考える導きとなる本（桑田）

＊価格は税込

危機の時代と宗教（丸山照雄　法藏館　'02　2940円）著者は宗教に対する知性的な慎重さを、次の6点にまとめている。「①『最初に正しい宗教ありき』という立場をとらないこと。②『正法』（真実の宗教）を信ずることではなく、何が『問題』であるのかを見極めることを第一歩とすること。③己れを成り立たしめている『所与』の文化と歴史を学ぶこと、つまり『自己を学ぶ』ことを主題として、宗教の扉を開くこと。④独りの救い（覚り・楽しみ・安楽）を求める宗教と見えた場合、それがいかに崇高なものに思えても邪教ではないかと疑うこと。⑤一人の人間の眼前の痛苦に応えようとしない無益・無能の宗教は用いるに足らぬと心得ること。⑥いとも簡単に『利益』を保障するものは、宗教を騙る詐欺ではないかと用心すること」。

ガンディーと使徒たち（ヴェド・メータ／植村昌夫訳　新評論　'04　2940円）優れたガンディー伝。「受動的抵抗」「戦闘的非暴力」の戦略に結実したガンディーの宗教性と行動性が、冷静な知性によって脱神話化されつつ、時代的現実の背景の上に見事に描きだされる。

神道の逆襲（菅野覚明　講談社現代新書　'01　777円）「日本の神さまをめぐるさまざまな考えを取りあげ、日本人にごくなじみの深い形而上学的直観の形が、どのように問われてきたかを明らかにしようとする」本。萩原朔太郎の短編小説『猫町』に描かれる「風景の反転」を導入として、伊勢神道から吉田神道・垂加神道を経て復古神道へ至る神道史の流れが、きわめて柔軟な知性によって跡付けられた好著。

状況雑感　無限の中の掌

●蔵持不三也（早稲田大学教員／歴史人類学）

昔ある数学者と問答した際、無限とは何かと問いかけて、どの幾何学での無限かと反問され、最終的に無定義用語だと一蹴されたことがある。『掌の中の無限』とは、孫悟空のあのエピソードを想起させるなかなかに言い得て妙の題名だが、そこでふと想ってみたりもする。無限の中の掌というのはどうだろうか。たとえばダリに『ラファエルの最高速度』なる油彩画がある。透明なガラ（マリア）の体が、さながら積み木崩しのように分解して虚空に、見ようによってこちらに突進してくる、いわば幾何学の解体を暗示するような構成となっている。もとよりこのイメージの飽食家たる画家の発想がどのあたりにあったかは知らない。だが、仮にガラを掌に見立てれば、それは虚空に遍満しながら虚空を内在させるすぐれて存在論的な掌となるのではないか。

そういえば、『ウパニシャッド』の哲人ウッダーラカ・アールニは、「地の中にあって地とは異なるもの、地がそれを知らずその身体が地であるもの、地をその内部から制御しているもの」（服部正明訳）を不死の内制者、すなわち《アートマン》と呼んでいる。息子シューヴェタケートに榕樹の種を割らせ、中に何も見えないと答える息子に、見えない微少なものこそがアートマンだと諭す哲人の《有》の存在論。もうひとりの哲人シャーンディリヤは、このアートマンをしてブラフマンと同一視している。唯識にいう種子やライプニッツのモナド、あるいはグノーシスのプレローマ（充満）、はては量子力学などの基本概念とも通底するこうしたアートマンのありようは、点に表象される有の融通無碍性において、まさに無限の中の掌といえる。いや、これとても所詮は掌の中の無限にすぎないのか。

編集後記▶〈学問の日常的実践〉を目指す実学は、自らの知を涵養し、人間社会を平安に導く道具として、日本では古今の多くの人々に支持されてきた。今日の殺伐たる時代の中で実学的志向は一層強さを増し、無為無策の観念論者を斥けて俄然優勢の観を呈している▶しかし昨今の〈実学ブーム〉はバブル時代の残像でしかない。その〈実学〉とは、損得勘定のみに拡大鏡をあて、利益集団の再起を鼓舞する国家的キャンペーンの謳い文句と堕している▶『掌の中の無限』はこうした世相の中で正に究極の実学的世界を逆照射する絶好の訳書に感じられた。それは万人の生命・生存・生活全般に根源的な示唆を与える縦横無尽の人間考察である。苦しみ、痛み、喜び、希望のメカニズムの探求と、現象世界の真理の追求を目指す本書を通じて、読者は真の実学の方向性を発見し、自らの思考と行動の幅を広げてゆくに違いない▶邦訳出版の動機となるこの実学的側面は人文書自体の社会的使命を改めて内側から問い直すものでもある。人文書の契機もまた、「人間はどう生きるべきか」という本書の問い（究極の実学的問い）と同じ問いの中にあることを忘れてはならない▶本誌寄稿者の菊地昌実〔本書訳者〕、和泉仁士両氏に多謝。　『掌の中の無限』編集者